



隨筆雜記  
上





曾  
77  
101

隨筆雜記上之集



中山宗俊覺書

三齋公茶湯御教示之書

長岡佐渡忠勤清高院殿陳言書

宇土福地伊左衛門始末

嚴祕祿略記

御格之事請書

八代妙見社祭上月志水一併

水道橋火事始末



中山宗俊覺書  
齋藤高時聞書

熊本 中村整書

大正二年一月廿日寄  
中村楠雄氏贈



若田 中山宗俊覺書

一 函每様 二 方家 三 印知 乃 言 之 幸 天 文 六 年 之 将 軍  
義晴卿 之 印 焔 土 之 言 義 藤 之 印 之 取 往 征 夷 大 将 軍  
此 年 函 每 様 十 字 之 藤 諱 字 之 進 藤 孝 之 印 元 收 乃  
印 是 紙 代 江 列 大 津 也 同 地 在 也 之 印 願 知 音 石 印 并 願  
其 後 二 方 義 晴 卿 永 祿 十 年 所 收 洛 之 任 征 夷 将 軍 永  
祿 之 依 勲 功 岩 成 主 祝 女 出 城 青 竜 寺 之 進 之 印 是 之  
二 方 家 之 印 是 知 也 之 後 元 祿 三 年 西 郊 桂 川 限 三 十  
余 卿 一 様 之 印 是 之 印 八 信 長 卿 之 印 是 知 之  
一 函 每 様 實 之 二 方 義 晴 卿 之 印 子 之 有 之 由 成 祿 義 晴 卿 之  
印 子 之 舟 橋 家 之 詳 也 之 以 西 橋 家 之 言 倉 中 之 共 所 之 舟 橋  
改 之 于 今 舟 橋 之 中 之 以 西 橋 環 翠 軒 宗 允 實 名 宣 讀 卿



宣賢卿息女後号智慶院公方義晴卿之宿  
真以系嫌嫌之後奈良院近衛尚通公之女  
義晴卿之聘也不能辞于于嫌婦智慶院之三淵  
伊賀守晴負後妻義晴卿之下之晴負居完之室  
所花之御所近隣之上虫晴負別墅東山麓園崎  
アリ

藤孝公采産之地之後孫孫扶下勝後入道長嘯道世  
之地十リ指觀居之由十リ其後聽松院十云寺成南禪  
寺塔中至于今存之出林棟義輝心之三文所合足之  
本宅不入去懐歸之因崎之別墅之以福之而晴負之年遠見  
采産五之十暫之以嫁也之在舉之皆晴負心之之感心之  
藤孝公之女之所初之義輝心之所對面之後云方即不去丹橋

家名即春育之云即成長之通之丹橋家之即初字之り年向  
是後即求政之丹橋家縁属之盟之之藤孝公之字之り本之り  
藤孝公之九之威塔之云方即胎高之初之り又天文  
十九年藤孝公十七之り即年云方義晴之薨之玉之り云方  
義輝公之即近臣也亦為宣賢人之男業賢人之男枝賢  
之秀賢人之室之也之越中之好之之母堂為之池原之り  
藤孝公之即連枝師也之也之未没落之也之丹後國之即下之  
即春公之此息女之之希孫之即猶子之也成丹橋秀賢人之  
之嫁身秀賢卿之之希孫之即年之即盟秀賢之男秀相之  
室寂照院殿之り吉田神主二位兼治之之娘之り寂照  
院殿之即母堂之丹後郡之也一也之而義有後之り之り之り  
淨勝院殿之り







忠軍響駭軍と云沙也あり。此時 忠興公ハ水軍  
沖用之と云舟を敵國へ出せ成るは之を為るは跡  
一色友軍亦之は廻る地は考古云大ナリ。此の勝利 天下  
一統ニ考古云之来、隨江也舟を別ニ色立沙滿宗成  
極子之故は舟を考古云跡也。一色澤一軍入る事也  
沖村果して成る天正十一年九月五日ハ日ハ不詳也。此  
或云天正九年九月跡坂日十年九月八日也。其云云

一 明智日向守成誅及之刻 忠興公沖村孫丹波國守中  
以送其孫下波世之。其後多ク天正十年ニ友信長云信忠云  
沖父を孫而上流 忠興公ハ備中國守松城為所加。此の地  
之威長云沖用之調々之任去云沖父子孫而上流ニ因之。其  
是信忠ハ久之居甚九節 沖勅氣而許有今友信忠孫

可為沖依て求政。沖益用之。沖村之月未丹後の上流信長  
仍往坂中ハ求政が京令出川相國寺門前ニ居て居敷人者  
長之如。六月二日ハ大駭動あり。以村求政が二男藤守印  
於云後馬正十二天ハ相國寺塔中唯長老ハ入学し兼約  
之。其上上ハ又早田道鬼跡と云武切ノ穿人育るハ  
此道鬼跡も同道して上上ハ之徳大建者りのハ信長ハ  
沖父子孫而自善し。以丹後之注進道鬼跡ハ付別  
刻丹後ハ指下ハ口ハ之を及ハ大變ニ承録八年以來ハ今日之  
少其ハ沖厚恩信長云之離之ハ難ク支那肝令ハ可ハ  
思ハハハ沖無傲ノ沖一身ハ働ふ成事ハ才一敵味方  
ハハ不分明世ノ中ハ求政問鑑して一与中ハ飯田  
可任ハ之ハ六下ノ沖人教ハ上流也。其止ハ勢也。其























進之道鬼母量其心之志林松倉見開少之習修功有  
鬼母計中冲父子様一作人但道鬼母ト云者八日申吉

謀強情ノ者ニテハ救政ニ据掛首置秀若公九列冲出勢ニ付五分  
米日即太馬是政ノ月系豊采夫山扱亦持即太馬是政ニ秀若公方  
乃帝廢切亦希有ニ示棠杖ノ入交先ニケリ申卷下凡物共ニ示祝下上之

一長臣本氏肥後宗信或云志直於豊前誅戮其作甘ハ親父

阪河豊采宗祐阪河山城守信時男父子同日冲討果江成肥後

國沖稱石親子罪科知可三ノ次本ニ奉ハ岡ノ原陣ニ

時分阪河豊采石田三成列之難成乃柄大陣之初石田

方豊采宗信之伐和志此罪科大石之在沖中

五ノ山此岡ノ原陣八慶長六年ノ豊采并肥後父子

冲討果江成八慶長十年私云有也又ノ原 東照宮

冲利運之此陣中 忠貞公冲忠賞之依て慶長六年ノ冬

豊采國冲拜領冲入於成岡岡ノ原陣取切依て阪河

肥後ハ在志ノ称号公以許長臣肥後之改豊采國冲依仁

り白知乃合子衣亦不豊采ノ馬嶽岩石城北作甘ハ岡原

軍功冲藤次以城ハ姓年長建次冲在つハ築岡城ハ又阪河豊

采ハ八岡國竜王ノ城生江作甘ハ千衣知乃此下在城之肥

後九年ノ一ノ九知勇ハ仁石黒岡山此水之是納之出入

石坊取平公肥後ノ使者ハ在石知也此水虛病ヲ持一討也

亦取此百目之冲信氣之流為江生口上并岡六之城而自

申之是村取水對面口上戸田是岡六持系信也中云

何之如水等ハ八月六日是也云云此作賞也ハ取平ノ

云獲取水法云是形ノり衣服ハ江江取成ハ沖也平

持系信ハ書付也ト云掛冲月ハ江江取成也中云云























市家市代ノ市儀リ市秘書ニ於テ市文庫ニ而収存  
傳乘ル極ニ市軍義滿ニ初メ市方ニ市家勅許  
兵杖牛車等、勅許ニ准五抄家ニ節令大弁トモ初  
官職ニ治有市方武家ノ棟梁トモナリ市家如右職公  
方家ニ礼法分クテ市家ノ身トモ以今川小室系伊勢ニ家  
市作市政撰集市書号ニ三議一流大双紙ニ武家  
ノ故実ニ書ク此書トモト軍將義晴義輝義昭公  
三代ニ幽抄採市近臣市佐者トモ市勅トモ此ニ室所  
旧例式トモト市長云年因テ市利運ニ成テ直  
方故、市登城ニ依市所於京都天下一流ニ賞爵被  
授ルトモト市秀老公必市遺戒天下人トモ市大寺トモ  
市寺乃ハ市体トモト市政勢トモト市政ニ依テ市トモ

大神君市入款ニ成テ或ハニ市年誅戮ニ家ニ於後或ハ  
ニ市海收蔵少河方市俾而カク市一人ニ思任成  
ナリ於京都市政勢トモト市永徳姫リハ礼式武家棟  
梁トモト市ハ一ヶ宗廟トモ朝廷ニ政ニ依テ市因茲  
細川家ナリ市平市家武家ノ故実傳へトモハ慶長  
市年ナリ市市あり市時城別ニ市山佛徳山真壁室  
寺ニ詣テ市市右近大夫直勝碑石アリ其辞内ニ慶  
長五年秋市田三成作乱大神 自將伐之使諸將先馳  
大戰于濃州岡原三成等就擒於居士列于隊長速  
於大神君之制圖外也今居士尋訪前代柳勞之  
儀式故事于細川玄旨乃晤焉是上是為其隨取宜  
宜治革故也トモト市是トモトモ市ハ羅山翁トモト

勞營ノ誤











好く勿存りし事なく上りては信長公秀吉公下りて蒲生  
氏人相を力不存りし事なく此二所と自向すかしては  
之を丁自らし武道とや事日次とすは今もや  
好愛事ありては他もあはれむ時の間なき一書  
の條一とて歌歌万語ありし我一もかゝる事なく  
ゆて武藝と流流せし馬の中も及武具もなかり  
な多し余力もな事な用許幽粒とすは事武士の  
宗匠の大業し御りし今宗と噂方ありけりは  
うもふ元の者もけりしと迷ふ事なく面白  
事とありし事ありしゆへに事なく事なく事なく  
物と何れも中十日廿日の用なき事なく事なく  
るは是れ大なるおぼい事なく事なく事なく事なく

うもへ柄抄好子はるたふありとも十月の月日  
世の世も事なく事なく事なく事なく事なく  
りり何信長より御威状下されし事なく事なく  
より血も事なく事なく事なく事なく事なく  
る英推するゆへに事なく事なく事なく事なく  
宗務も事なく事なく事なく事なく事なく  
ゆへに一人の公下り方への事なく事なく事なく  
信長公秀吉公宗と御好しゆへに事なく事なく  
宗務とせし事なく事なく事なく事なく事なく  
と下りし事なく事なく事なく事なく事なく  
ゆへに事なく事なく事なく事なく事なく  
事なく事なく事なく事なく事なく事なく  
事なく事なく事なく事なく事なく事なく































私儀に 幽齋様以来沖向家六代御奉仕の  
以来源流光表す一病を、法成られたりとも不始成  
以終つとも寛介と観る中又極く交中、京野志と云  
ふに長成とも、ゆゑに、幸為二九、その意等  
と、中、年、法、家、中、極、く、交、書、中、半、に、お、成、仕、成、  
一、法、成、仕、成、十、日、斗、か、る、中、に、当、漸、く、と、書、調、中、に、  
と、法、成、仕、成、法、成、御、成、く、く、と、有、法、成、と、書、  
命、め、り、く、く、と、今、一、度、 沖、目、見、仕、お、果、十、五、年、  
斗、に、り、中、右、と、御、成、法、成、法、成、法、成、法、成、  
萬治三年正月十日 長岡依波守

山本三太郎殿

一 最初に文武のつと多、法、く、す、小、條、書、房、中、多、福、徳、信、書  
と、い、ふ、物、と、師、く、軍、法、と、傳、く、甲、冑、の、利、用、川、越、の、玄、奥  
を、と、目、く、試、法、ひ、才、一、法、中、く、中、中、も、大、小、成、ひ、り、り、  
冠、家、の、小、姓、も、入、出、見、て、是、より、い、く、く、初、次、と、好、ま、せ  
られ、法、成、ま、さ、り、仕、成、も、ゆ、み、な、り、後、法、成、長、又  
江戸、人、ゆ、り、て、十、五、年、の、書、法、と、指、か、り、其、又、白  
一 沖、首、家、ハ、幽、齋、様、之、齋、様、忠、利、様、不、く、し、御、成  
切、才、一、或、た、才、ふ、沙、公、成、法、成、法、成、と、法、成、法、成、  
法、成、武、成、人、成、法、成、と、南、沖、代、武、成、と、其、法、成、  
目、と、送、り、  
齋、様、武、成、法、成、法、成、法、成、法、成、法、成、と、法、成、  
法、成、法、成、法、成、法、成、法、成、法、成、法、成、



一 皇朝之清酒高而之智之法之造而養生之教而不戒  
之也

一 清代之忠節之志大之程至而付以成之志此小姓在也  
正身之知而之平之也

一 忠節之節之友此初而之平之也清代之之節之族存  
之也

一 不忠而之金銀其脚之正抱每初之清見物之也  
清代之也

一 近年如法用入中台家法而門以成之也初而人中  
恐其若之從言仕念法成志之書之法之友能初之也  
也中之也

一 今者清家府之法例也之也聖業法也小姓在  
之也清代之也

一 近年之法物入清代之也清代之也清代之也

一 清代之也長也 正義之清勢味能法成之也  
也

一 清代之也格式也格之也何之也清代之也  
先例之格也格之也清代之也

一 清代之也清代之也清代之也清代之也  
清代之也清代之也清代之也清代之也

一 清代之也清代之也清代之也清代之也  
清代之也清代之也清代之也清代之也

一 清代之也清代之也清代之也清代之也  
清代之也清代之也清代之也清代之也



月日

長岡信渡

右愛教氏藏書 天保七 丙申年十月十日字之中村直道

直道宗 長岡佐州 諫書等見大秘祿前集可考

長岡氏系譜云 大略附之

康之 榊曾助 新助 始仕將軍義輝後仕細川家信長秀吉

正月廿三日死年六十三 益之 八郎 文祿二年八月十五日死于肥前名

貞長 吉松 新太郎 武部 兵衛 佐渡守 母同益之 慶長五年 齋原 坂岸

有戦功 忠貞 被諱字以其女妻之初為豊後村築城主後居八代城未地

寄之 始興之岩丸 長岡武部 佐渡元和二年 曾生 實忠與之男 長長 養子

寬文元年 六月廿九日 續佐渡長遺跡 領八代 拜謁 家綱 公 寬文六年 曾

大日本史卷之六十六

慶長二年 十二月下旬 光尚 棟 於 河 戶 治 而 芳 子 紀

為 及 出 去 也 而 棟 材 舟 小 笠 原 右 衛 門 左 衛 門 長 長 期 也

以 附 出 公 之 外 而 一 門 棟 方 後 成 此 節 長 長 期 也

長 長 期 也 舟 小 笠 原 右 衛 門 左 衛 門 長 長 期 也

遊 沖 遊 去 也 舟 小 笠 原 右 衛 門 左 衛 門 長 長 期 也

以 入 公 執 事 書 付 之 字 又 亦 至 之 代 安 矣 後 考 之 戶 名

次 即 是 也 棟 材 劫 年 而 人 亦 至 之 代 安 矣 後 考 之 戶 名

一 乃 之 亦 打 者 仕 小 笠 原 右 衛 門 左 衛 門 長 長 期 也

以 節 綱 利 棟 中 初 雅 成 也 庭 紀 後 由 之 細 之 物 玉 筋







上那忘忘... 依金... 依金... 依金...

一 個利様... 集原... 記... 依金...

一 此初... 記... 依金... 依金... 依金...

一 此初... 記... 依金... 依金... 依金...

一 此初... 記... 依金... 依金... 依金...







分札

此書不審く致したる記

一丹後守行存平年と云ふあり二年十四年未中し未中後  
下在年終と云ふ 公義の福平と云ふあり未中し未中  
言はれ難文

細利平代と云ふあり印中未し未中 印代公ハ  
振合立のたのむと云ふあり念心と云ふ酒井公ハ  
中内公の起りたる中内公ハ平

一福知墓所 宇土泰雲寺に在りたる通

慶安二年庚寅年

圓之叔湛相信士 俗名福知平右衛門勝定

六月三日

伊守源懷信女然源姓始于嵯峨帝弘

一細利平慶安二年 庚四月十八日印遺領印相從  
諸家 作の福知余日八同年と六月三日  
印家智後と云ふ  
右の事と云ふ書に書附入と云ふ

己四月

井戸一水

右の事と云ふ一印の事と云ふあり未中し未中書と云ふ  
右の事と云ふ一印の事と云ふあり未中し未中書と云ふ  
より向合と云ふ福知の事と云ふあり未中し未中書と云ふ  
此の事と云ふ福知の事と云ふあり未中し未中書と云ふ  
お座との井門方は是れありと云ふあり未中し未中書と云ふ















































其の室とち蔵しきり存を言美藤入ト送リ  
らまハ甚深陀法下大の勢を申しお進法五一り  
とけりかろ山端法もく只ひ今も年一  
成りりりそころけらま

そ何の意あり

ゆけりてふ文抄を極くやあつて月と水と魚  
之年の末初とハ其細川ハ二方一切の進法とそり  
板くよ小後所もあけり進中めんがーと流しきり

かくて執中より望十立ちて所死をの死ありと進八回  
火の白波にハ監物あましく切抜けりて進りて進

お果おれきりつハ進たの 不鹿者ありとておん極  
或初願なれとあつり首と削りてお坊と馬本とあつハ  
執中と手負とん極く外に流きとあつたの流き  
控物とて進放し進りて進



右此一件之内由成り高第派の巻の如くは  
書くありし幕後派の全平の如くは只其  
幕後派の如くは平一了しし以て平一とす也  
後と云ふは其の如くは平一の如くは

天保三年正月十日 中村萬壽直道

沖橋之事

- 一 三沖家老并沖後家元が沖物次以下は侍慮外  
より其の手討之事
  - 一 沖備既沖城代とて山中姓以下は手討之事
  - 一 二子石く山原とて本地の百石以下は修式河とて七  
慮外とて浦原八手討自刀流之事
  - 一 沖法親が拾提以下は山中姓とて山例の如くは平  
討之事
- 但此の使者は平法親入修と手討之長流居願之事  
其其者山中姓とて同罪之事
- 一 平法親高上法親入修とて山中姓の輩以下は平姓町人  
討之事











市書附示朽也危く集録あり

天保三年酉年一月十日書あり

中村萬善直道

文政二年九月八代御番松平公同書付

御内定之覚

社名改由不御番願に付有在るに流率に改出老翁に流初斗  
以秋に作有且又三伏統十一の秋意に以任守書秋并憚多  
幸任り流流者無不立休た一書の御内定

一先般御家指此目之御御出御府此許出致逢之初表御去  
其方改出也御有御出之立社名に下流御に御御同公御力  
社名に下流御秋出社名に定に御先格に上之御社に社名  
然下御御之御編之御御出御府此許出致逢之初表御去  
御力御出也御有御出之立社名に下流御に御御同公御力  
御御之御出也御有御出之立社名に下流御に御御同公御力



















































十月十日

長安山城

二月廿七日

高水牛年

沙家格... 文政二年九月八日... 十月十日... 十二月

文政二年九月八日

口達

台田二部

高水牛年... 文政二年九月八日... 十月十日... 十二月

九月十日

山城家格... 文政二年九月十日... 十月十日... 十二月



























一 沙玄冥前未後... 沙青... 何... 執...  
... 沙... 何... 執...  
... 沙... 何... 執...

一 家... 送... 文... 祈... 何... 執...  
一 傳... 聖... 教... 傳... 何... 執...  
一 何... 聖... 教... 傳... 何... 執...  
一 文... 武... 已... 之... 祈... 何... 執...  
連... 名... 在... 此... 中...

一 布... 通... 之... 祈... 何... 執...  
一 年... 氏... 沙... 何... 執...  
一 他... 對... 面... 之... 祈... 何... 執...  
一 祈... 玄... 圓... 之... 祈... 何... 執...  
一 他... 獨... 不... 祈... 何... 執...  
一 有... 月... 之... 祈... 何... 執...  
一 為... 祈... 何... 執...

九月

長島山城

此... 祈... 何... 執...  
... 祈... 何... 執...  
... 祈... 何... 執...  
... 祈... 何... 執...







有吉織部  
長尾監物

長尾山城攻

石代城後所より朽也... 長尾山城攻

天保三年辛酉年一月...

中村直道

水道橋火事一斗

濱町様沖代寛政元年二月十九日... 水道橋火事一斗... 沖野府白... 水道橋火事一斗... 沖野府白... 水道橋火事一斗... 沖野府白...







































沙中野路中分波面在也

尸其後有之皆唯今之月行殿上之有也

至六月十七日

之書深矣人江打殿之沙書有在也

五月晦日其大之在也其初日人殺酒井内記松山入  
移之及之梅是程在也初日江之江之梅之梅之梅之梅之  
打之志之新之元之肉之肉之肉之肉之肉之肉之肉之肉之  
一一一一一 思之之之之之之之之之之之之之之之之之之  
以通沙之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之

至六月

早之公之沙廣矣矣之矣 作行記以對  
公義之成身之之之之之之之之之之之之之之之之之之之

七月朔日 沙登 城 沙掃殿之其當為

之在也其之之之之之之之之之之之之之之之之之之之

以之大事之之之之之之之之之之之之之之之之之之之  
思之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之  
那之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之

一 大事之之之之之之之之之之之之之之之之之之之  
之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之  
沙之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之之







右水道橋大平一伴之書所記流芳翁意乃氏  
草稿之月筆之乃古之流之我人下之乃  
亦而之流之乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

天保三年丑歲二月念五日 中村萬喜道

随筆雜記上之集終



